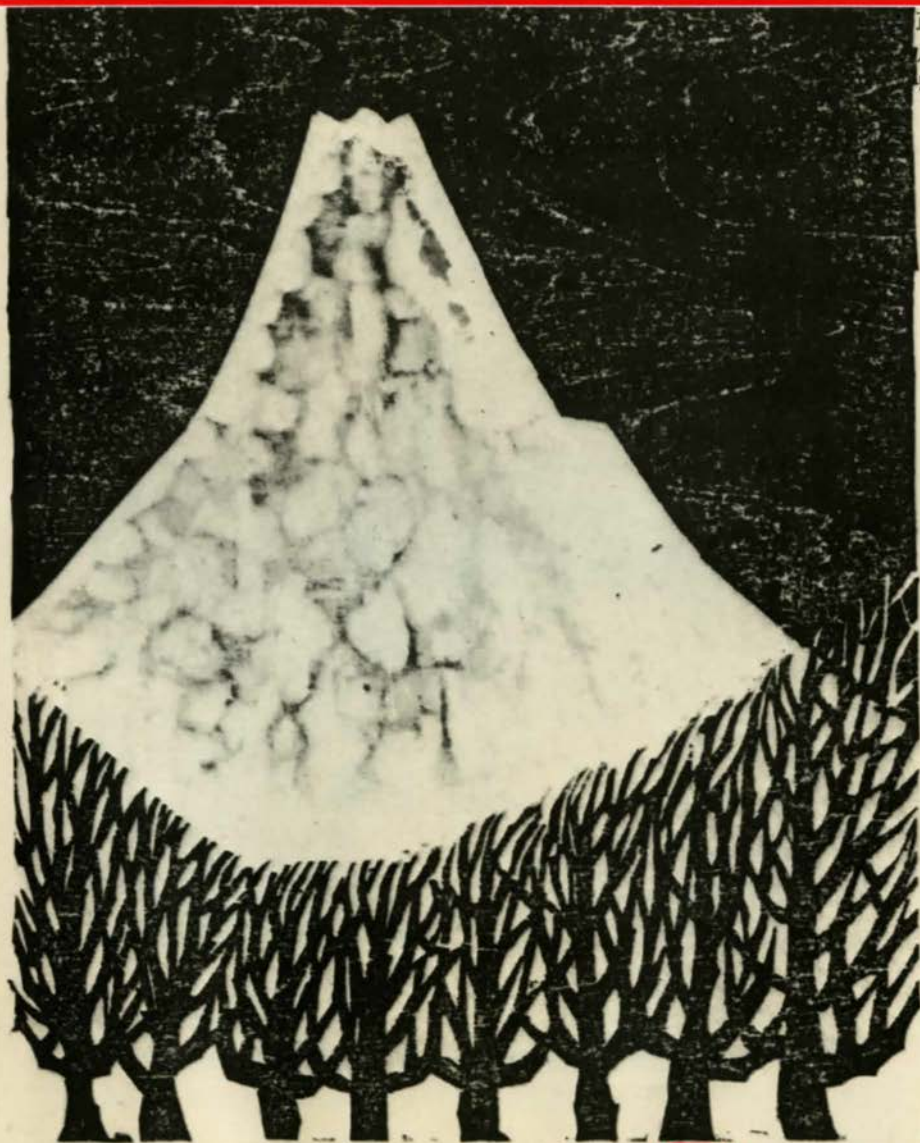


浄土

1984-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十八年十二月二十五日印刷 昭和五十九年一月一日発行
第五十卷

正月号



小林



「今 日 ハ」

浄土門主 藤 井 実 応



正月号



仏の無礙智（むげち）の如きは、
通達して照したまわずということ
なし。

——『無量寿経』四誓偈

目次

——〈年頭所感〉——

ネズミの譬喩譚に想う……………	藤井実応……………	(2)
光りの中を!!……………	中村康隆……………	(7)
願力に生かされる……………	稲岡覚順……………	(11)
新年随想……………	江藤澄賢……………	(15)
初誦経……………	一田善寿……………	(16)

《世相評談》

正月無常……………	須藤隆仙……………	(28)
-----------	-----------	------

新春随想

小庵日録……………	守中裕幸……………	(22)
-----------	-----------	------

〈ずいそう〉

京都岡崎・吉田界限(≡)……………	戸川靈俊……………	(38)
-------------------	-----------	------

◇◇ 新春早々、お詫び申し上げます——……………	(43)
--------------------------	------

浄土句集……………	一田牛畝選……………	(36)
-----------	------------	------

〈表紙裏・染筆〉「今日ハ」……………	藤井実応筆
--------------------	-------

表紙 小林治郎画

カット 大正大学美術部

年 頭 所 感

ネズミの譬喩譚に想う



浄土門主
総本山知恩院門跡

藤井実応

新年おめでとうございます。

本年は子の年であります。十二支の第一で、方角では北、時刻では真夜中の零時、またはその前後をさします。十二支というのは、い

うまでもなく、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の総称で、時刻や方角を示すのに使い、また、十干と配合して年や日を表すために用いられるものです。その十二支のそれぞれを動物の

名にして呼ぶことは、古来の習俗であります
が、第一を子^お、つまりネズミに当てます。

ネズミといえ、ドブネズミ、クマネズミ、
コマネズミなど、いろいろの種類があります
が、多くは人家の周辺に住みついて、よく物
を食い荒すので嫌われます。中には、愛玩用
に飼われたり、実験用に使われたりして、少
しは人間生活に役立っている面もあるので
が、一般的にどうもあまり評判がよくないの
は事実であります。昔は、天井裏で暴れたり、
台所でお正月の餅などをかじったりするもの
ですから、鼠穴に猫イラズをしかけたり、鼠
取りという道具で捕まえたりしたことを、想
い出します。また、壊色^{やぶいろ}といつて坊さんの衣
や袈裟に鼠色のものが使われることがありま
すが、これは、一般の人が好む明るい派手な
色調を避けて、わざと暗く濁った、ドブ鼠色
にするという古代仏教の戒律によるものであ
ります。つまり、人から好かれない色の代表
としてネズミが使われたというわけで、色の

面からもマイナス点をつけられた動物といえ
ましょう。

おまけに、頭の黒いネズミなどと呼ばれて、
いやしい人間の形容にまで使われるのですか
ら、いささか気の毒なような気もしないでは
ありません。

ところが、一方、このネズミの繁殖力とい
うものは凄いいもので、物・事が急激にふえて
ゆくことの譬えには「ネズミ算」という言葉
があり、利子のふえ方のすばらしい「ネズミ
講」などと称する金融詐欺まで流行したこと
があります。

ネズミはこのように、一方では嫌われなが
ら、憎まれっ子世にはばかる譬えの如く、他
方、恐るべき生命力でふえつづけ、一向に人
の生活から姿を消す気配はありません。地球
上に人類が生存する限り、ネズミもきつとそ
のおこぼれにあずかりながら生き残ってゆく
ことでしょう。ここで想い出すのは、『譬喻
経』という古い經典に出ている黒・白二匹の

ネズミに関するお話であります。

黒白二鼠の譬喩

旅人が広い野原に出て、どちらへ行くべきか迷っていた。突然、恐しい狂った象が追っかけてくる。危ないので隠れ場所を探したが、なかなか見つからぬ。漸く一つの空井戸を見つけ、その中にかくれようとした。都合よく一筋の藤の蔓が井戸の中へ垂れ下っていたので、それにつかまって、中へ下りた。狂象は追いつき、恐しく唸りたてたが、井の中へは降りられぬので、一まず危険は避けられた。ところが、暗い中が見えるようになると、井戸の底には怖しい毒竜が、彼をひと呑みにしようと、大口をあいて待ちかまえているので、中途に止まり、足をかけようとすると、井戸の四隅に一匹ずつ四匹の毒蛇がいて、よらばかみつこうとしている。彼の恐怖は窮りない。そ

の上、黒と白との鼠が代る代る蔓の根をカジりはじめた。鼠を除けようとしても手がとどかぬ。絶体絶命の思い。ところが蔓の根のところに蜂の巣があり、蔓が動く、ぼたり、ぼたりと蜂蜜がこぼれ落ちて来た。五滴ほど口の中に入った。その蜜の何とよい味か。甘露の味とはこれかと、目前の危機を忘れて、ただその蜜の落ちてくるのを待ちに待つのであった、というのである。

このお話の中で、「旅人」というのは、われわれ人間、私自身のこと、「曠野」は、どちらへ行ったらよいか、ウロウロする迷いの生活、「狂象」は刻々迫り来る無常の歲月、「空井戸」は生死のこと、「毒竜」は死、「四匹の毒蛇」は四大衆素（つまり、われわれの身は地水火風の四元素から成り立つという考えで、それが調和していると健康、不調和になると病氣、一つでも欠けると死となる）、「黒白二鼠」は夜と昼（交替で過ぎ去り過ぎ去ってついに死を迎え

る)、「蔓の根」は生命の根源、「蜂蜜五滴」は五欲(睡眠・食・色・財・名譽、あるいは眼・耳・鼻・舌・身の感覺欲のこと)を意味しております。

すなわち、われわれは、常に五欲の煩惱に執われて無常の理を忘れ、毎日毎時、つかうかとかと目の甘い利欲に目がくらんで、人間の真実に生きゆく道、永遠なるものを求めようとせず、悩みから苦しみへ、迷いから暗がりへの生活を、あくせくと繰り返しているにすぎない、ということ譬えたものであります。

まことに人生を活写した深刻な譬喩であります、特に心を打つのは黒白二鼠によって示される無常の譬であります。

諸行無常の教えは三法印の一つで、釈尊の繰り返し説かれたところであります。天地一切は刻々に動き変つてゆきます。万物はみな変化してゆきます。國際情勢も日本も、社会もわが町村も隣人も、家庭も親も子も、わ

が身自身も変つてゆきます。生あるものは死んでゆき、会うものは別れてゆくのが世の常なのであります。

「つくられたるもの、たえず移りゆく」という諸行無常の教えこそ、言いかえれば、すぐゆく「今」の一瞬を意義あらしめよ、ということに他なりません。

古人も、「一大事とは今日ただ今のことなり。今をおろそかにして明日あることなし」と申されております。また、法然上人が先師として偏に私淑された高祖善導大師は、その著の中でも、しばしば「今」という語を用いて一瞬一刻の時の大切さを強調され、無常偈を通じて、今を力いっぱい真剣に生きぬくことを説かれたのであります。

例えば、「人間はあくせくいろんな仕事を抱えて働いているが、日夜に生命がすりへっていくことを覚らない。まるでその姿は、風の中に揺れ動いて、まさに消えようとしている灯火のように危^{ともひ}かしいものだ」とさえ言

われているのであります。それはちょうど、目の前の甘露の誘惑に酔いしれて、一刻一刻ネズミにかじられつつある生命の危険を覚らない、井の中の旅人の姿に他なりません。

新しい年を迎えたといつて、人は有頂天にめでたい、めでたいと喜んでいますが、実はそれだけ死に近づいたわけで、冥土の旅の一里塚にすぎないではないか、と一休禪師も警告せられました。これからの一年、三百六十五回にわたつて、「黒白の二匹のネズミ」が日夜交替でひっきりなしに、われわれの生命の綱をかじりにやってくることでしょう。そして、遅かれ早かれ、綱は切られて、毒竜の待つ井戸の底へ落ちることは間違いありません。二匹のネズミにかじるのをやめさせることのできない窮地のわれわれは、一体どうし

たらいいのでしょうか。

法然上人は、こういう凡夫のために、お念仏の相続を説かれ、日夜お念仏さえ称えていれば、阿弥陀仏の本願力によって、たとえ生命の綱が切れても極楽往生間違いないし、と教えて下さったのであります。自ら「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくてもこの身には、思い患うことぞなき」と謳われたのも、御自身の念仏して到達された境地をお示しになったものと存じます。一年の計は元旦にありと申します。どうかネズミの攻撃を怖れず、本年も衆生とともに念仏生活生きゆこうと決意しましょう。恩師の歌に、「時は今、ところ足もと、その事に、打ちこむいのち、永遠の御命」。

年 頭 所 感

◇
◇
◇
年
頭
所
感
◇
◇
◇

光 り の 中 を !!



大本山増上寺法主

中なか村むら康こう隆りゅう

光明会の故田中木又先生の『遺文集』中の「心田田植歌」（光の中）には、私の年来愛唱
している次のような歌があります。

一年三百六十五
にちにち春風 ふく家に

なろうなそのの 掌てを合あわす
人の長所に 目をつけて

誰でも一家中が毎日春風の吹く家になりたいと願わないものはないでしょう。一家の中が花開く園生であることほど、人々に安らぎと幸せを感じしめることはない筈です。

それなのに今世界中に争乱の煙りが絶えません。中東・中米・東南アジア・アフリカ、世界中といつてよいでしょう。戦争放棄を宣言しているわが国の周辺にすら、血なまぐさい事件がくりかえされているのは、まことに情ないことです。

お釈迦さまの時代も、印度では戦乱が相続いでおりました。御自身出生のカピラ城も遂に敵の手に陥ち釈迦族も四散したことでした。このような悲しい時代に、もし軍の将たらば恐らく非凡な軍略をめぐらし不世出の英雄となられたことでしょう。事実マガダ国王ピンビサーラから出家を思い留まって印度統一の大王たるよう勧められたほどでした。しかし釈尊は遂に肯んぜられませんでした。争いをもってしては遂に争いは止まない。永遠の平和は闘争によってではなく、個人も家族も民族も互いに我執・我欲を棄てて、相手を尊重し助け合う共生きの大道をこそ歩むべきだとされたのでした。アヒンサ（不殺）とサンガ（和合集団）の旗印しがそれでした。

そのお釈迦様の御生誕から二千五百五十年の甲子きのえねの閏年の春がめぐってきました。甲子の年は十千十二支の一巡する六十年の最初の年に当ります。昔は毎年初の子の日には子の日の遊びといって、一日野外に遊んで小松を引いて帰り、酒宴を催したりしたといいます。大伴家持が天平宝字二年春正月三日宮中賜宴に、「初春の初子のけふの玉簪たまはな手にとるか

らにゆらく玉の緒」と詠んだ歌が、『万葉集』にのっています。酒は愁いを掃う玉簪とはこのことでしょう。松の千年の寿にちなんでの祝いで、子の日に野から持ち帰った小松と著（めどぎ）という草で作った小簪（簪は魔障をはらい寿福をもたらす呪具とされた）で、竄室などを掃き清める習しも行われたのでした。現今でも出棺後に座敷を掃く風があります。が、同じことを年初に行った訳です。

それが正月上の子の日に行われたのは、子が十二支の初めとされ北方に配当されたからでしょう。こうした正月始めの子の日の尊崇から俗に正月三ヶ日には鼠を呼ぶに「嫁御」と崇める風も起ったのでしょう。とにかく、上代には逸早く道教の思想が伝えられ、陰陽師の手によって子の神崇拜が弘められ、それを後に修験者たちが子の権現として仏教化したのでした。

東京の根津権現も子の神社とされますが、伊豆下田の近郷旧中の瀬村は子の権現を鎮守とし正月には餅を喰べないそうです。奥武蔵の高麗・名栗両溪谷には聖天信仰と子の神・子の権現信仰が色濃く残されており、特に飯能近郊の天竜寺は出羽修験の流れを汲む寺で子の権現として足腰の癒病に効験が高いとされるほか、近辺の高麗本郷・上名栗・下赤工・清流・宮沢などには子の神社・子聖社・子御前社などが残っています。この信仰は一面には鼠の害を避けようとの農民の願望から弘まったのでしょうが、半面鼠が大国主の危機を救ったという神話伝承から大黒天の使いとされ、従って招福の神とも崇められたのでしょう。御承知のように大黒天は印度ではシヴァ神の化身とされ特に厨房の守り神と崇められていたのが、中国に入り、伝教大師によってわが国にもたらされて弘められたといわれますが、殊に甲子の日をその祭日とし、夜半子の刻まで寝ずに祀ったといえます。

◇
◇
◇
年
頭
所
感
◇
◇
◇

甲子年の甲子待は、とりわけ六十年一巡の始めの祭ですから、もっとも重要視されたことは申すまでもないでしょう。

この春にこそ私たちは人類の将来に恒久の平和の続くよう、何にもまして祈るべきではないでしょうか。米ソ両大国は互いに核の削減を呼びかけながら、逆に核軍備を増強しています。ソ連は口先では核不使用をいいながら、極東にもいつか核をふやし続けその力を誇示しています。他に対する恫喝と隔絶した軍力とて、自らを守る闘争主義よりも他と手をつないで生きる共生主義の遙かにすぐれた道であることは、既に歴史の立証するところでしょう。

甲子年のこの正月こそ、人類は平和への道を選ばねばならぬ正に岐路に立っていることを深く想わねばならぬと存じます。そのようにして全世界の家々に平和の栄えがもたらされますよう念じて止みません。

正に闘争主義の暗黒の恐怖から共生主義の輝かしい光明の道へと歩みを変えるべき時は今です。白隠禪師は「独掌鳴るを容さず」といわれました。握り拳を振り廻わしてエゴと自己偏愛に固執しては遂に滅びへの道でしかないでしょう。エゴを捨て我執我愛を去って相手の立場も尊重して互いに手と手を取り合って生きるところにこそ光明の喜びが現前するといふものです。「花は合掌に開けて春を待たず」(『和漢朗詠集』)とは若き日の菅公の詩句です。合掌の心をいつも忘れずに生きて参りましょう。

願力に生かされる

大本山金戒光明寺法主

稲 いな
岡 おか
覚 かく
順 じゅん

一、地球は大調和のいのちの世界

すがすがしい朝だ。ここ黒谷の空気はあくまで新鮮だ。うつ蒼たる老松は朝日に照ってまばゆい。境域に繁茂する雑草の緑が美しい。大空には小鳥の群れが飛び交っている。足許では小鳩が餌をつまんでいる。掃き清められた石段では小虫がすでに営みを始めている。黒谷山頭の朝は生きている。生命のいぶきがみちみちている。

私共の棲家である地球も生きている。完全大調和のいのちの世界である。

二、調和の世界

晩秋の荒野をかけぬける。ふと見ると、ズキンに草の実がまつわりついている。何げなくつまんで路傍に捨てる。センダン草の実である。

セندان草は「お願いします」とも言わないで、種族保存の役目を人間にはたさせている。

人間と名もない雑草との「共生」である。

南瓜かぼちゃの花に蝶や蜂が群がる。

蝶や蜂は南瓜の甘い蜜を求めて集まるのだが、代償として雄花の花粉を雌花に運んで、交媒の役を果している。

昆虫と草花の「共生」の姿である。

人間は酸素を摂取して炭酸ガスをはき出す。

植物は炭酸ガスを摂取して、人間に酸素を提供してくれる。

植物と人間との「共生」の事実である。

この様に見てくると天地間の事々物々はバラバラで雑然としている様だが、互いにもちつもたれつの助け合いの世界であったのだ。

春夏秋冬、日月星辰の運行は寸分の狂いもなく、森羅万象は悉く処を得つつ、分担協調の二辺を果している。その中に私共人間は生かされ続けているのである。

正しく地球は大調和の世界であった。

三、いのちの世界

完全調和の世界である地球は、また「いのち」の世界でもあった。

地球は無限に広がる銀河系の一部、太陽系の一惑星であるが、私共の目の届く範囲ではこんな神秘のいのちの世界は、外に見当らない。

月は地球のただ一つの衛星であるが、古来「兎の餅つき」のロマンを持つ詩の世界であったが、宇宙探検の結果は生命の一片もなく、荒漠たる岩石の塊りである事が判った。

夜空に輝く赤い星「火星」には「火星人生存」の夢があったが、科学探究の結果、火星人はおろか、一片の生命もない事を知らせた。

水星、木星、金星、土星（太陽の惑星）等に生命存在の可能性はまずない。

して見れば宇宙無量の星屑の中で、ほんの一握りの小さい星、地球にのみ生命世界が将来されている不思議を、どううけとめたらよいのであろうか。

四、「大きな力」の流れ

宇宙の歴史は二兆年、地球の歴史は四十五億年とも言われている。

地球は初めは混沌たる漂よいの中から、次第に秩序が生れ、山海金石となり、草木が繁茂し、生命が生まれた。

生命は「アミーバ」の如き状態から進化して、無足（みみずの如し）多足（むかでの如し）四足（牛や馬の如し）となり、ついに二足（人類）の出現となったものである。

悠久の昔から進化や淘汰の繰り返しの中に、断絶する事なく流れ続けて来た、生命進化の不思議は、偶然ではなく、そこに「一貫した流れ」、この流れを支配する「大きな力」のあった事が知られるのである。

破壊の中に建設があり、淘汰の中に秩序が生れ、遅々たる歩みではあったが、堅実の歩みを支配する「大きな力」を否定できない。

この大きな力を「宇宙の意志」とも宇宙の根源力（シャクティ）とも言い、法然上人は

「法爾の道理」とも示すのであるが、今私は、この力を「如来の願力」「阿弥陀如来の本願力」と呼ばせて頂くのである。

この「如来の願力」は信仰の開眼の人以外には気がつかない尊い力である。科学的探究の世界では宇宙の謎も地球の神秘も解明することは困難である。

科学者 A・クリセイ・モリソン（一八六五—一九五一）は宇宙の謎や地球の神秘を解明しようとして果さず、その結論として、

「この不思議はどのような科学的研究によっても究めることは出来ない。強いて言えば目にも見えない曲者がいて、われわれはあやつられているのだ」

と歎息している。この曲者の正体は何か、信仰時立場に立つ時、立どころに納得が得られるのである。如来の願力がそれである。

五、法蔵菩薩の悲願

悠久の昔から無窮の未来に通ずる「大きな力」とはそのまま法蔵菩薩が衆生済度というやむにやまれぬ悲願から、兆載永劫の苦難に堪えて、ついに成就した「願力」の現われであつたのである。

仏説無量寿經は次の如く物語っている。

「遠い昔、法蔵と呼ぶ沙門がいた。衆生済度の悲願をたて、浄土の建立（完全調和の生命世界）の願を起し、兆載永劫（想像を超えた長期間）の修行をはたし、ついに成就した。今現に法蔵は「阿弥陀如来」となつて衆生済度の実を續けている」との説話である。

法蔵が衆生済度のために、悠久の歳月をかけて苦難に堪えぬかれ、ついで浄土建立を果

したとの筋は、地球の混沌たる中から次第に秩序を産み、ついに人類の登場となり、文化社会をきづくに至ったとの筋と類似している。

この物語を通して、宇宙の生成や人類文化への歩みが、法蔵と呼ぶ修行者の行跡として物語られているのだとうけとる時、架空的とも思われる法蔵物語の中に、宇宙生成や人類文化の流れを、「法蔵の願力の流れ」と吸みとることが出来る。

太古の原初から漸次発達をとげた人類文化の歴史を、法蔵の兆載永劫の修行の結果と考えることが出来る。

また、われわれが今うけている、あらゆる文化の恵みが救済主たる阿弥陀如来の本願力の現われと見る事は誤りであろうか。

この様に頂かなければ法蔵物語は、現代に生きないし、如来の願力は拝めない。

六、生かされる喜び

この事に気がつく時いつでもどこでも、願力に生かされ続けている、わが身の幸せを感じる。

小川のせせらぎも雲の動きも、小虫の蠢動にも、如来の願力を頂くのである。

「有難いことだ、尊いことだ」との気持が如来の願力に合掌し念仏する態度となる。

かく頂く時、法蔵はもはや過去の菩薩ではなく、宇宙進化の意志の中に、社会文化の生命の中に、無窮に生き続けるのである。

私共はこの法蔵の悲願を体し、願力の重みを頂き、よりよい文化の建設に、住みよい社会の達成に努力することが、願力に応える報恩行であったのである。

新年随想

大本山清淨華院法主

江藤澄賢 えとう ちようけん

昨年の十一月十八日の新聞報道で承知したのですが、三十五歳の男が、その友人とはからって、四億円かの遺産相続をねらって、その母親と弟二人とに手錠をかけ、コンクリート造りの密室に鎖でつなぎ、その上、角棒でなぐったりしたということでした。

これを聞いて、観無量寿經の王位をねらう王舎城の悲劇を連想しました。それにしても、金銭欲、名誉欲等々をめぐる争いや殺人などの、なんと多いことでしょうか。法然上人のご法語に、「念仏の助業ならずして今生のために身を貪求するは、三惡道の業となる。往生極樂のために自身を貪求するは、往生の助業となるなり」(『勸修御伝』第四十五卷)とあります。

眞実の大生命に摂取されてゆくという人生の目標・意義を、万人万様の人々が歎びあえる社会、自由で平等で平和な世界への前進——浄土への往生を見失って、ただひたすらに、財産とか地位とか名誉とかを貪り求めるばかりの生活は、まさに地獄・餓鬼・畜生・修羅へと落ちこんでゆくのであります。

利益を求めて競いあい、奪いあって共倒れしてゆく生き方ではなくて、浄土への往生を願い、お念仏の生活のうちに、御利益を頂いてゆく、共に生かされてゆく人生を進みたいものです。このためには自分の身をも生活をも大切にしたいものです。

◇◇◇年頭所感◇◇◇

初 誦 經



初鵜大本山の森深く

大本山善導寺は福岡県久留米市善導寺町にありまして国鉄久大線善導寺駅より歩いて十分間位の所であります。浄土宗第二祖鎮西上人の建立で、又入寂の地で、浄土宗の念仏の根本道場として有名です。

大本山善導寺法主

一 いち
田 だ
善 ぜん
寿 じゅ

(俳号牛畝)

牛畝

直ぐ裏は筑後川で三万坪の森に包まれ、

十七間四面の本堂障子貼り

牛 畝

十七間四面の本堂を中心として七堂伽藍を並べ、初鵜が鳴いて誠に静かな霊場であります。

初誦経堂塔守護之諸善神

牛 畝

法主に迎えられたからには堂塔を守護することが大きな責任です。特に火難を免れることが注意第一ですから、初誦経には堂塔守護のために法主我心そそぐ可きであります。

法主我一山率ひ初誦経

牛 畝

昭和五十七年九月一日に大本山に入寺いたしましたので五十八年初めて正月を迎えました。一山を率いての初誦経で本堂より三祖堂へ。三祖堂は本堂より渡り廊下を渡り六間四面の堂であります。中央に善導大師が、その左に鎮西国師がまつられ、共に国重要文化財であります。右が元祖大師であります。此の様に御三体がまつられていますから三祖堂と申します。

三祖堂の鎮西国師には安産祈願者が絶えません。

夫婦して安産祈願の初詣

牛 畝

正月早々夫婦連れ母娘連れの参詣が続きます。一年間五千組以上が安産祈願、出産御礼に続きます。

鎮西国師の御両親は太宰府の観世音寺の観音様に祈願されました。この寺は斉明女帝が新羅との戦争に九州に西下され、朝倉の宮にて崩御されたので、その子天智天皇が母君追善のために建立された寺であります。

観音様に祈願されたその甲斐あって二条天皇の応保二年（一一六二）五月六日玉のような男の子が産まれました。その年は源氏が平家に負け牛若丸は鞍馬寺に預けられ、頼朝は伊豆に流された年でありまして、法然上人は三十歳の年でありました。

折角誕生されましたが母上はその日の内に無常の嵐にさそわれ死亡されました。国師は七歳の時母上追善のため仏門に入られ、十四歳の春、日本三戒壇の一つである筑紫の観世音寺戒壇に登って受戒されることになりました。戒壇院の隣は観世音寺であります。今は亡き母上が自分を授からんがために祈願された観音様と思えば「何卒我心願を遂げさせ給へ」と両手を合せて伏し拝み給えば、松吹く風の音も小川のせせらぎも皆亡母の励ましの声に聞えぬものではなく、道ばたの石ころも草も、皆母が踏まれた石草と思えば亡き母上恋しきものばかり、斯くして満願され僧籍に編入されたのが承安五年三月十四日で奇しくも善導大師の祥月命日、法然上人が比叡山より降り給い、東山華頂山の下にて「往生之業念仏為先南無阿弥陀仏」と絶唱された月で、京洛の天地にては浄土開宗、筑前の國に於ては鎮西上人のこの様な日であったと記念すべき、忘れることの出来ぬ日でありました。

上人は比叡山に登られて八年間修学され、二十九歳の時帰国され三十歳の時に油山の大衆の要望にて学頭となりました。油山はその時代の九州第一の学府でありましたから、上人は九州第一の学者となられ沢山の弟子を持たれることになりました。学問の暇々には九州全域をお巡りになり、衆生教化に力を注がれたことと存じます。建久二年の秋に筑後の国の井上原を通られますと六人の山賊にお逢いになり説法を聴いて上人の前にひれ伏し、前非を悔いて信者になりました。この事を聞かれた筑後の国司発心山城主草野永平は上人のために寺を建立し井上山光明寺と号された。これが後に善導大師を博多港に迎えられて

光明山善導寺となったのであります。この寺が建つ時に六人の山賊は工事の手伝ったことで今では鐘楼横に六地藏として祀られ参詣者が続いています。

上人は三十六歳の時九州全体を巡られて明星寺の五重の塔再建の勸進をされその本尊を作って貰うために京へ登られた時、法然上人に初めて面会され弟子となられたのであります。八年の後に元久元年秋四十三歳にして浄土宗二祖となられまして九州へお帰りになされました。

上人は亡母の墓前に浄土宗二祖となられたことを奉告され「ああ我のために産後死亡された母のためにどうしたらよからう」と両手を合せて、お念仏を称えられたことと思われまふ。そして母上菩提のために産家の跡に寺を建立されたのであります。お産のために死亡された追善のために、この世に身籠る婦人へのために阿弥陀像を刻まれました。その像は母上託胎の体を写し腹帯をされていますので「帯の阿弥陀如来様」と申し只今の北九州市香月町の吉祥寺の本尊様であります。毎年四月二十七日より三日間法要が行われ、この腹帯如来様の御開帳は沢山の参詣者で大変でありまして、山内一面の藤は真盛りで参道には出店が連ります。

開山忌人人人の藤の寺

牛畝

大本山善導寺の開山忌は、

菜の花の金色浄土開山忌

牛畝

筑後地方の菜種の花に本山は包まれ、三月末から四月にかけて大本山は菜の花に取りまかれます。丁度菜の花の金色浄土で九州全地域からの団参のバスは寺裏の筑後小堤に連ります。その川土堤も菜の花の金色浄土です。九州全体より出勤された僧侶にて法要が勤

修されて、国師像を輿に移し、太鼓や笛や笙を吹いて門前町の人々が昇ぎ、法主や衆僧に稚児が門前町の釈迦堂に向かいます。

肅々と花の参道法主以下

牛畝

この句碑が昭和五十八年三月二十九日、大本山の要とも呼ばれる樹齢八百年の巨楠の下に建立されました。私が善導寺入山記念として建てられた私の句碑で、関係者約六百人が集まってくれました。

この句は辻村玄瑞僧正が作曲して下さって、詠唱教師の前田秀峰上人がタクトを取り、吉水講の皆々が称えて下さいまして句碑除幕式が賑やかでありました。

花の枝突き開山の奥通す

牛畝

参道には桜が咲き初めました。その枝を突かねば輿は通れません。桜の枝を突き揚げて花の参道の両側には店が張り巡らされています。その雑沓の中を行列は進んで行きます。

いつもより早き桜や開山忌

牛畝

九州地方は雛節句は一月遅れの四月ですから大本山の開山忌の頃には、

門前に雛市が建ち開山忌

牛畝

門前通には雛市が建って賑かです。この様に町をあげて開山忌で賑うので、参詣者の中には安産祈願や御礼参りの人もあって、雛も売れ行きが大変多いのであります。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

新年早々『浄土』誌の遅配と相なりましたこと、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本号より、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきましたいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、大西耕三先生の風趣に富んだ版画も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八―八二―八七

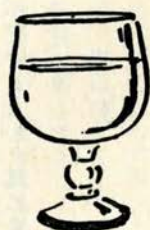
(新)

(春)

(随)

(想)

小庵日録



○

時として精細な叙述よりも、単的な表現の方が、事態の特色を明確に把握することが出

もり なか ゆう こう
守 中 裕 幸

(東京・新宿区専念寺住職)

来るので、よく古人の名言名句を借用することとを好む人があるが、借用句の意味を深く考えないままにかえて浅薄な文となってしまうことがある。

○ 「日日に新たなり」というのもよく使われて居るが、過ぎ去ったすべてを前提として、新しい日が始まるという意を忘れて、過去はすべて忘れ捨て去って。都合よく新しい時代が開けるといふ風に考える人もあるようである。

○ 或る人が、若い世代に何を期待するかという問いを發して來た。しかし自分は答えに窮したのである。

自分が期待するのは年令の老若ではなくて、何か自分の当面する課題があつて、そのことが最早自分達の手に負えなくなつて來たので、誰かの助けを得られれば幸であるということならわかるが、それが、新進氣鋭でなければ駄目ということではあたらない。それよりも、むしろ先ず、自らの解決すべき課題が何であ

つて、その解決のために役立つような人間関係を求めるには、自分の課題を宣明することの方が先だと思つて居る。

○ 自分が、こうして今、日常メモとして置いたものの中から、洩りがちなペンを、おそるおそる走らせて居るのは、自分の氣づいたことに他人がどう反応を示すかという、淡い期待と、自分自身を離れた言葉が、自分自身のその後の考えや行動を改めて拘束するだろうという自身の意志もあつて、編輯者の甘言に敢えて再び乗つて見たのである。

○ 考えた時には思いもしなかつた客観的な意味合いが、表現してしまつた結果として現われ、そのことによって自分自身を拘束することとは絶えず起ることである。

○
従って自分の欲していないことを軽はずみに言表したがために、やむを得ず行為として実現せざるを得ないという結果を、我々凡人は繰り返して来たのである。

○
慰めと救いについて、我々の負って居る役割の重大であることは言うまでもないことだが、この二つの区別をはっきりと意識しないで、事にのぞんだり、伝道をしたり、という情景を前にすると、自分自身も含めて慚じ入ることが、余りにも多い。

○
人間は常に慰めを求める存在である。そしてしばしば、愛も慰めとして求められ、その故に愛を完成することに失敗する。

○
自分自身、人を救うなどという大それた事はのぞまないが、せめて人の慰めになるようなことが出来るようになりたいと思う。

○
一般的に言って、死の恐怖とか、死後の世界に対する恐怖とか不安に関し、慰めを与えらるという頗る重大な役割が、我々宗侶にはあるのだが、本当に積極的な意味では、生きることへの恐怖をはっきり自覚せずに居る者が、死の恐怖に際し、直接に対処出来るとは思えない。

○
信仰の確信ということが、学習という知識的な自他の経験の積上げによって到達出来るものでないことは明瞭である。しかし、宗祖のような大天才であっても、同様な過程の中

で確証を得られたという意味で、やはり重大な契機となることは否めない。

○

我々は物事の部分的な特徴について、特に強い印象をうけると、必ずそのことについて批評家的觀察をする。しかし、しばしばその批評は全体の正しい把握を怠っているために結果として、批評にならぬ批評を行うことになってしまふ。

○

いつも気になって居ることが、一つある。西欧の近代文明の成立に、絶対必須の要件となつたものの一つとして、印刷術の發達がある。

あらゆる近代文明の綜合の役割を荷つたこの歴史的事実について、我々日本人は正確な評價をして居ないように思う。

民衆の教育の拡大、各民族語による聖書の

翻訳、出版によって、人々の前に真理がその意味をあらわにはじめ、才能ある人々の自然科学への自由な参入等、列挙することすら大変なことだが、我々はその文明の果実を、その歴史的価値の重みを感じずに享受して居る。

○

我々はこの現代の文明の中でもなお、中世的構造の教団組織の中で、現に今日の我々の自身の言葉で、法祖以来の教義を、經典を、人々の前に展開し、人々の心に感動を喚起し、慰めを伝えようとする努力を怠って居るような気がする。現状を少しく善意に解釈すれば新しい方法を採ることをためらって居るとも言えようか。

○

この頃ほど教育という語が、巷に氾濫することはなかったように思う。

教育の目的は、その中に本来矛盾した二つの要因が始めから含まれて居る。

現状に順応させるためと、現状を飛び越して（或は現状を打破して）新しい世界を創造させるためと、又、社会の要請に対して個人の将来の生活を有利にしようとする要請。

この相対立する二つの要因を、一々の個人に於いて調和させようとすることは頗る困難なことである。

緻密な知的訓練をうければうける程、その成果に個体は束縛されるし、憲法の言う個性の伸張を主張すれば、世の中の指弾をうけるような過程をも覚悟しなければならないのである。



世の中の目を見張るような展開が、いつも知的訓練の熟練者の手によってだけ行われたのではないことも、心によく留めておかねばならない。



善良という語にも二つの意味がある。何もしないことによつて、どこへも害を与えないから善良であるという場合と、その人の人格が周囲にはつきりと感じられるほど、温和柔順な影響を与えるという場合である。



我々は何故に永遠なるものを求めるのであろうか。死という避け難い定命に対するベシミスムから生じた観念であらうか。再生を敢然たる事実として確認するオブティミスムの故であらうか。



どんな大勢の友人達と談笑して居ても、少しも楽しくなれない自分に気づく時はど、孤独と不安を感じることはない。しかし又独り閑窓に座して、和かな陽射の中で、先賢の書

の中に没頭して居る時ほど、孤独も不安も全く覚えず、倅せに満たされて居るといふのは不思議なことである。

○

巷は選挙で騒がしい。自分は保守とも革新とも自覚はないが、ひるがえって所属する教団をながめると、徳川幕府の管轄下で、実に均勢のとれた組織構造を造りあげ、今日なおその形態を維持するために、いわば最少減の努力をして居るのが、我々の実態であるが、今日のように政治的支配を全く脱却した時代に於ても、我々は出来上って居るものに何等の疑義をも持ってはならぬかに見える。宗祖立宗の本義が江戸時代以来数百年の間に変質させられた事実は皆無であつたのか、宗団の今日的在り方はこのままでよいのか、もっと自由に考え直して見るべき時機がさし迫って居るような気がする。

◇ ◇ ◇

惜 春 賦（昭和二十五年三月）

若草萌ゆる野に出でよ
過ぎゆく春を惜まばや
虚しく空に消ゆるとも
命の限り唱わばや

袖ひるがえし踊る手に
散りゆく花も留らず
野末に風の立つ見えて
陽もはや西に傾きぬ

われ朋がらと手をとりにて
別れし丘の麓道
ああ若き日はかくしてぞ
音もえたてず消え行くか

（五八・二二・五）

《世相評談》

正月無常

正月早々、縁起でもないと叱られそうな話題で恐縮だが、すでに「門松は冥土の旅の一里塚目出たくもあり目出たくもなし」と歌ったのは、室町時代の名僧一休禪師であった。奇行をもって知られる一休禪師は、またあ



須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

る年の元旦、墓所から髑髏一頭を拾い出し、それを竹の先にくくりつけて街に出たという。ある商家の門をトントンと叩き、家の中から出て来た人にその髑髏を差し出して、「御用心、御用心」といったそうだ。

家人がいやな顔をすると禪師は、「これをよく見て下さいよ。ほらもとはここに目があつたのだよ。今は目が飛び出してしまつて、穴ばかりじゃ。ああ目が出た目が出た、目出たい目出たい」といったそうさ。

何とも大変な話である。禪師は、世の中は無常であるということを忘れてはならぬと、まず元旦にそれを教えたのであつた。

ものの本によると、一月を正月というのは、秦の始皇帝が「天下を正すべき月」としたからだというが、その当否はともかくとして、この月が年の変わり目、境い目であり、人間生活に大きな区切りをつける時期であることは確かであり、心機一転の時でもある。

この時に当たり、大宇宙の根本理である「諸行無常」の真実を改めて考えてみ、その理の中にうごめく人間世界、そしてわが命といたつたものを見直してみることが大切なことであつて、一休禪師の皮肉に、異論をはさむ余地はないであらう。

ところで、最近の社会問題の一つとして浮上してきたものに、一家心中ということがあらう。昔もなかったわけではないが、こんなに頻発はしなかった。最近はひどい。

しかもその動機が、一様にサラ金に手を出したことによる。サラ金地獄などという言葉があるが、地獄から救出されることもなく一家消滅してしまふとは、なんたる悲劇であらうか。

それというのも、その地獄に堕ちた原因が、自分の考えの甘さに発していたのであつてみれば、誰を恨むことも、頼ることもできず、死ぬより他なかったのであらうか。悲劇が悲劇を生むというが、手放しに多発してよいものであらうか。罪もない子供まで道連れにしての一家心中のニュースは、視聴するにたえられぬものを感じる。

折も折、昨年、フランスで『自殺・その方法』という本が物議をかもした。一昨年（一九八二年）四月に発売されたものだそうだが、

この本を手引きに自殺したとみられる人が何人も出たという。中には神学校の生徒までがいて、死体の傍らには聖書ではなく、この本の著者であるイブ・ル・ボニエックという人の手紙があったという。フランス中が大騒ぎになった。信心深いフランス国民にとって、この事件はショックだったらしい。

発売以来苦々しく思っていた警察は、「未必の故意」による殺人容疑で調べたという。

『広辞苑』で「未必の故意」を引いてみると「行為者が、罪となる事実の発生を積極的に意図ないし希望したわけではないが、自己の行為から、ある事実が発生するかもしれないと思いながら、発生しても仕方がないと認めて、あえてその危険をおかして行為する心理状態」とある。

この本は安楽死の勧めであり、五十七種の薬品リストも載っていたという。

この本は確かに「悪魔の本」ともいうべきものであろう。しかし悪魔であっても、毒薬

であっても、要はこちらの接し方次第である。ゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』（一七七四年）も多くの自殺者を出した。この小説は、感傷的人物ウェルテルが、友人の婚約者ロッテを恋し、ついに自殺するという内容のもので、今回の『自殺・その方法』とは全く性格の違う本だが、しかし結果は同じことになっている。

そのことは、問題は「あちら」にあるのではなく、「こちら」にあることを教えてくれている。

私たちの周辺には、悪魔も毒薬も、充滿している。加えて諸行無常という何人たりとも抗しあたわぬ真理の中に生を営むこの身には、一休禪師ではないが、ただつねに「御用心」するのほかない。

仏教の有名な比喻の一つに、「無常の狼」の話がある。

ある王が、罪を犯した大臣に、「罪を許してもらいたかったら、太っていないが脂（あ

ぶら)のない羊をもってこい。すると許してやる」といったそうさ。考えに考えた大臣は、ついに一計を案出したという。一頭の羊をつないで置いて水草で養い、日に三度ずつ狼をそばへ近づけて、その羊をおどしたのである。その結果、羊はよく肥えたが、肉に脂はのらなかったという。これを王にささげて王をびっくりさせたそうさ。このように、無常という狼もまた、つねに人間をおびやかしているのだという。

人間は、この「無常の狼」を自覚しなければならぬ。狼を自覚し切ったとき、そこにもはや狼は存在しない。無常のままで無常でなくなる。無常そのものが常住となるのである。

菩薩は無常の狼を見て煩惱の脂を消し、かえって功德の身を太らせるといふ。

われわれは菩薩ではないにしても、無常を悟ってわが身の肥やしにしなければならぬ。

何かが起こると、すぐ「社会が悪い」とする風潮にも問題がある。

前記のフランスの場合でも、その本を発行した出版者は、「フランスで絶望し死に走らせる社会の方が問題だ」と反論したそうさ。なるほど一理はあるう。しかし一面からいえば、ちょっとしたことですぐ絶望する体質そのものに、却って大きな問題がありはしないか。

ところで、無常という語の意味を、今一度確認しておく必要があるであらう。

中村元博士監修『新仏教辞典』に、「無常」は梵語アニトヤの訳であるとして、「生滅変化してうつりかわり、同じ状態に止っていないこと」とある。つねに移り変って変化していることが「無常」なのである。ところが、ときどきこれを「無情」と誤解している人の説に出くわすことがある。大間違いである。ムジョウのジョウは「常」であって「情」ではないのである。「つねなし」であって、「な

「さけなし」ではないのである。ミゼラブルではないのである。

諸行無常といえは、いかにもミゼラブルのように考えられて、そのように解釈している人が一部にあるようだが、誤解である。

あらゆるものが移り変わるから、若者も老いていき、生存者も死亡するので、無情のようにとらえられがちだが、真の「無常」の理は、病気がなおって元気になるのも無常であり、貧乏人が金持ちになるのも無常であり、不幸な人が幸福になるのも無常であり、弱者が強者になるのもまた無常である。勿論その反対も無常である。要は「移り変わる」ということのみである。

仏教はこの宇宙の真実を教える。まずそのことを知ることが、仏教の第一歩である。

このことがわかると、心に貯えができてくる。無常の世の中に対する心構えができてくる。

サラ金の話にしても、無常の理がわかる

と、安易に手を出せるものではない。少くとも最低限の返済の目処があつて、はじめて借りなければならぬものである。その目処もないのに、ただで金が浮き出てきたかのような錯覚にかられて、次々と借金を重ねていく。しかも行き着くところが一家心中であつては、人間としてあまりにも無責任過ぎはしないか。

思案余つて死を選んだ人に、ただ非情な追い打ちをかけて言っているのではない。

サラ金の制度が悪いとかなんとかいう前に、わが心の中をよくよく照し出してみる努力が必要ではあるまいか。

そんなことは出来るものではないというい方もあろうが、自滅するような、一家心中するような事態よりは、その努力のほうがましである。

サラ金業者間でオンライン方式を採用したところもあるという。過剰貸し付けをなくするため、個人(客)信用情報の充実を、という

のが理由だそうだ。過剰融資勧誘など自主規制する基準作りも進められているという。

だがその道に詳しい弁護士の話では、「これまで業界の体質を考えると、過剰融資が簡単になくなるとは思えない」という。

昨秋、札幌で面白い事件があった。サラ金に手を出して借金が雪ダルマ式に膨れ上がったある男が、夜な夜な泥棒稼業をしてそれを返済し、その上は自分で貸す側に回ろうとして、ますます泥棒をつづけ、ついに警察に逮捕されたのである。その男が捜査員に語った言葉がケツ作である。「忍耐の忍、これが私の人生訓なのです」といったという。

無常の理がわからぬと、忍もとんでもない方向に動き出すことを教えてくれる事件ではあった。

この稿を書き終えたところへ『婦人公論』十二月号が届き、女優の木暮実千代さんが「ふえる親子心中、子供だけは残して」と題して、サラ金苦による一家心中には子供は道

連れにしないで残して欲してくれ、そのための施設があると訴えている。すばらしいことである。詳しくは同誌を見られたい。

(新刊)

宮林昭彦著

『生活の倫理』

B6判 一九四頁(豪華装本)
定価二二〇〇円(千二百五〇円)

◎春の章・夏の章・秋の章・冬の章・法の章——五章よりなる連作宗教的エッセイ。著者のやさしい滋味深い文章が印象的、かつ感動的!!

(発売)

千102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

大 道 社

＜『浄土』誌連載にされた大長篇歴史小説＞

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

— 法然もやぐる人々 —

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 丁各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

浄土句集

一田牛畝選

評 大本山増上寺において、二十一歳の娘様が授戒をお受けになった。そして手を合わせる身となられたことは、これ又有難いこと。

熊本 山崎 石庭
看護甲斐ありて退院爽やかに

熊本 山崎遺迎子
大秋日橘湾を染めて落つ

福岡 荒牧 亀齡
板の間に坐り珠数繰る十夜婆

評 よい妻よい嫁を持たれている作者。入院されてもお二人に看病された甲斐ありて無事退院されて伴者である。

評 日露戦争の軍神橘中佐が産れた湾である。大秋日が海を染めて落ちて行くその景色は誠に美しいことならん。

評 満堂の十夜会に坐ることならん。畳の座よりはみ出て、板の間に居眠りもせず珠数を繰っている。十夜婆の姿は何とも有難い。

福岡 原 敬二郎
西安に月の踊りと云うを觀し

福岡 上滝津弥音
五重会の心大事にさわやかに

福岡 服部 光代
露草や昔家老の屋敷跡

評 西安はシルクロードの起点で、玄奘三蔵の大雁塔や、唐の高宗の小雁塔や、則天武后と善導大師等物語りは尽きぬ。その月の踊りを觀られ、思い出深いものありしならん。

評 大本山善導寺の五重相伝に妹を誘われて加入された。称名礼拝と心身共に大変だったことならん。心は爽やかであったとは有難いことだ。

評 福岡藩の分家の秋月城の昔の城下町ならん。家老の家も、今は露草で、昔の隆盛の物語も淋しいことである。

東京 吉田ゆきゑ
妙真と授かりし娘の秋授戒

熊本 石原 杏子
老松に秋雨静かな善導寺

街中の橋に釣人鯉の汐

福岡 安藤平次郎

秋深し滝の茶店は閉ちしまつ

福岡 権藤みきを

初釜の一人二役客と主

山梨 青山富貴江

逸早く大本山に色鳥来

福岡 林 澄山

念仏に生きる伴木の葉髪

群馬 島津 か寿

地藏盆併せ古仏も淨焚す

福岡 前田 秀峰

せせらぎの聞ゆる軒に釣葱

東京 真野よし子

雲行きを案じつ山の辺初時雨

三重 山田 歌甫

椎葉村棚田の稲架の幾重ね

福岡 行正 明弘

葛の花清き一生修道女

東京 栗原やえ子

ハレー彗星再会想ひつつ夜長

広島 皆本浅茅路

秋夕焼窓空もつとも華がす

福岡 西村 元子

堪えがたき残暑も去りて今朝涼し

東京 末常てる子

昼時雨飛驒の茅舎をかすめけり

長野 友洲旋風子

嫁姑競ふが如く柿をむく

福岡 木下富士子

もどりたくなし高原の花野行く

東京 田中 秀代

夫婦連ればかりの旅の秋日向

福岡 荒牧 還愚

訪ひし師は早や傘寿なり菊日和

福岡 稻永美恵子

暁の夢覚め虫のかそけさよ

東京 小笠原香祥

伴にうもれいてふと秋思あり

熊本 山崎 松子

それぞれに外出予定文化の日

福岡 田代 葦女

粧へる山を左右の船の旅

東京 猪瀬 幸子

お十夜の導師まばゆし新住持

山口 上野 明達

男の子には羽子板市の纏買う 一田 牛畝

の日の友が教えてくれたように鈴鹿性を名乗っている。

戦火を蒙らない京都には、いくつもの古い貴重な町ぶりが今に遺されているが、ここ吉田の社家町も、もう一つの京の代表的な社家町、上賀茂、下鴨とともに、いつまでもいつまでもその古風な町の姿を残されてほしいものである。

社家中心のこの町には、古来、仏寺めいたものは賀茂と同じように、時代は遷っても、今に到るまでその存在は無い。

社家なり、この町生え抜きの家々には、亡くなれば——他の社家町では、この時だけは、川向いの他の地域の寺院に祭事を托する慣習があると聞くけれども吉田神社への参道の際の「祖霊社」に斎き祀られるという。その人達の眠る神楽ヶ岡の一角にある吉田神葬墓地は、異教めいたものを一切拒んで、一脈の清々しい雰囲気を感じて漂わしている。

吉田山頂へそぞろ歩く途中、神葬墓地の中に、学生時代鑑いた「国文学史講話」の著者東京帝国大学教授佐々醒雪の墓碑を見出した折のこと。明治の美

文調で書かれた佐々醒雪博士のその本に魅せられた若き日を想い出し、私は、ふと、佐々醒雪は私の近くのこの吉田の土地の或いは社家の出自ではなからうかと一種の懐しみと親近感を覚えさせられたものである。

兼好法師が、その麓で自らの「徒然草」を書いた吉田神社。吉田神道とも卜部神道とも呼ばれる神道教学と今の吉田神社との関係は、どの様なものであろうか。

一年の大祭節分会を頂点とする習俗、民信として表現されるものの根柢にある吉田神道、習慣として社家に支えられているその背奥の吉田神道の真の姿とは？ 吉田社家町のあたりを歩む毎に、そんなことを考えさせられる。

吉田神社を中心とするこの地域が大きく変貌してゆくのは、なんとしても、この吉田の広大な地域に京都大学が創設されたによることを誰人も否むことができない。

変貌してゆくのは吉田ばかりでない。その近接する岡崎も聖護院も、更には浄土寺も鹿ヶ谷も田中も



北白川でもある。

京都大学の創立は明治三十年、丁度日清戦争の終結した頃である。はじめは理工科大学として、それから徐々に医科が、法科が、文科が設立されていった。

まさに日本は、大國清國に勝ち十年後の日露戦役を前に、日本資本主義の勃興期にあった。

明治維新後、都を東京に遷されて、火の消えたように寂れる京都。漸く明治二十二年一青年教師田辺朔郎による琵琶湖疏水の開通と平安神宮の造営と、日本最初の万国博覧会開催とに、復活の氣息が見えたとは言え、この最高学府の開校は京都市民全体にとっては大きな歓呼に迎えられるものであった。

吉田本町に、比叡への白川街道を校地にとり込んでまでの広茅数万坪の京都大学の開創について、大阪から移って吉田二本松町に第三高等学校が、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学の工芸学部）と市立絵画専門学校（現市立京都芸術大学の美術学部）は、共に吉田上阿達町、下阿達町に設けられていく。

こうして、吉田の地は東の本郷に対して、西の学

問の極府として、その存在は京都大学出現の当初から今に至るも変りない。東の本郷弥生ヶ岡、そして西の吉田神楽ヶ岡である。

この地域の近く、詳しく言えば東大路二条西入るの地に、豊臣時代秀吉の政策で、京の町中に在るにふさわしからずと、洛外の鴨川東の田圃の中に移された通称二条新地が、学校に近接して在っては、風教上面白くないとの理由で、明治になって文教当局なり府当局においてまたまた四散させうるの止むなきに至っては笑えぬ戯画でもある。

全国から若い学徒が学府を目指してやってくる。下宿が無い。その下宿の役目を代ってしたのは、黒谷や真如堂、百万遍塔頭の寺々であった。広い寺院の部屋は、恰好の彼等の止宿の室であった。学生に貸していえば法事にやってくる檀家の者たちも、京に最高学府を設けられた誇りに満足しているだけに、否とは言えない。こうして所謂名士達の想い出の中に、自叙伝の中に、青春の日の寺を下宿の情景が屢々出てくるのである。

今も京都ほど学生を大事にする町は無いと言われ

る。「学生」でなく、いつ迄も「学生さん」である。さんづけである。

お寺ばかりでない。当初、下宿屋のまだ出揃はない頃は、普通の家庭が全国から京に集り天下の英才のために、惜しげもなく、自分の座敷を提供した。

自分の下宿生の中から、何大臣か、文名高い誰氏か出てくれたことか、これも大きな誇りとして語草となった。

時が経つにつれて、下宿屋か、学生食堂か、文具屋か本屋か、その他もろもろの学生相手の商売が生れ、繁盛してくる。今もその名残りは尽きない。時折り、わがアルトハイデルベルヒならぬ吉田を訪れる天下の碩学、顯官諸公も、ここでは学生の日と同じように軽くあしらわれても怒れない店の主人達が幾人もあったし、今もある。

彼等は、本当に心から学生を愛した。金に困る学生には出世払い。今のように男女交際の厳しく戒められた頃の学生の恋愛の問題。彼等は単なる学生相手の商売人でなかった。故郷を離れて学ぶ学生のために、店の小父さん達、小母さん達は、親にも勝る

存在であった。

本屋のナカニシヤ、西川誠光堂の、神楽坂の丸三食堂の、山田錦水堂のおばさん達、あの人たちの前に来ると、みんな可愛い息子達であったと思う。

真如堂門前の笠井食堂のお齒黒の百姓出の女そのままに、三巾前垂れのおばさんが、生前よく学生時代の、後年大総長の風格をもたれた立命館大学総長末川博先生のことどもを樂しげに語ってくれたのも今はなつかしい。

京都大学は勿論創立が東京大学よりは、ずっと後だけに、創設当初の先生達は、殆んどが東京大学の出身であったことは否めない。

先年、貝塚茂樹先生の書かれたものに、父小川琢治は地質学、地理学の教授として京大に來たが、新しい大学京都大学へは、みんな開拓者精神でやってきたと語っていたというのを記憶しているが、若き教授達のこの開拓者精神こそが、母校東京大学に報いる、そして、それを超える京都大学を作り上げていったのであろう。

東京大学は長男が継ぐのなら、京都大学にやられ

た次男三男に、本家何ものぞの気慨が生れてくるのは当然である。

開拓者達には、のちのち栄転と解され勝な母校東京に帰ることを潔しとしなかった気風が満ちていたという。稀に母校に帰ってゆく者がありとすれば、その人は卑怯者視されたということを評論家中野好夫氏も書いている。

哲学の桑木厳翼は京都大学滞在暫くにして東京に移った。その後を承けたのが、東京大学で同期ながら選科生として冷遇されてきた宗教学から桑木博士のあとの哲学への西田幾多郎であった。

それからの哲学における京都学派——西田哲学の名は喧伝されるが、桑木哲学の名は呼ばれない。

あながち、京都学派とは哲学ばかりでなく社会科学の面においても、自然科学の面にあっても京都学派が言われるのには、その根柢に深く、反東京、反東大のライバル意識があるからではなからうか。

東京から教授達が京都に移ってくると、当然その子弟達も、京都の学校に転校してくる。

京都大学を通学区域にもつ私の母校錦林小学校に

は大学の先生達の子供が非常に多く入ってきた。その中で忘れられない一人は原子物理学の朝永振一郎である。

父三十郎博士が京大哲学科教授赴任とともに、本郷の小学校から二年生の時に転校してきたのだと思う。

振一郎氏がノーベル賞も文化勲章も受賞した後で父三十郎博士は亡くなられた。「デカート」と「近世における我の自覚史」の著で知られる西洋哲学史家の老博士の存在は、西田哲学全盛の京都大学ではいささか、その盛名に影は薄かった思いがする。

京大定年のあとは、ずっと大谷大学に出講されていると聞いたが、このことは、老博士が東京に在住の頃、当時西巢鴨に在った真宗大谷大学の清沢満之先生に私淑されていたご因縁によるものであろうかと、重誓偈を捧げたあとその御棺前で東京からかけつけた振一郎氏としみじみ語り合ったのは、振一郎氏も中学から大学の日へとその青春の日を過した京の学府の街吉田近衛町の細い奥まった路次のつつましい古風な中二階のある屋敷であった。

新春早々、お詫び申し上げます——

◇ ◇ ◇ 編 集 子

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞくれぐれも宜しくお願い申し上げます。とはいっても、誌面をお借りして早々にお詫び申し上げねばならないのです。『浄土』誌も新年に入り、第五十巻ということになり、創刊以来実に半世紀五十年をけみしたことになります。その記念すべき第五十巻正月号が、編集子の身体上の不手際から、思わぬ印刷の遅れ、発送の遅延という、会員諸兄の皆様には大変申しわけのない沙汰になってしまったわけです。

実は旧臘十二月十一日、編集子はふとしたことから左足骨折という不慮の負傷をいたしてしまいました。普通の雑誌でございましたら、編集子の一人や二人のささいな骨折などまったく関係なく、雑誌印刷・発送のことどもを速やかに処理できるわけでしょうが、実は、重ねて実は、本誌の場合は、かくお詫び申し上げております編集子一人にて細々と雑誌刊行の業務を遂行しております関係上、編集子自身の四週間の絶対安静の治療生活は、いきおい『浄土』誌発行の、この一大任務に対して、大いなる不測の事態を引きおこしてしまったわけでした。そのようなわけで、正月号は大幅に遅れてようやく本日発送できる運びとなったわけです。ここに改めて、心よりお詫び申し上げます、会員読者諸兄の暖かい配慮におすがり申し、お許しをこい願う次第であります。また、本号の謹賀新年の年賀広告欄も、旧来通りをお願いいたし、広告費援助の諸先生にはお断りも申し上げます、大変にご迷惑をおかけいたしましたことも、あわせてお詫び申し上げます。

なお、この正月号より表紙版画絵が、大西耕三先生から小林治郎先生にバトン・タッチされました。小林先生は、一九二〇年生まれ、東京美術学校（現東京芸大）卒、日本版画院理事としてご活躍されております。どうぞ宜しくお願いいたします。

◎ 読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい。）

一、枚数 四百字用紙八枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

◎ 『浄土句集』欄へ

ご投稿を!!

ハガキに折々の句を、数句づつお書き頂き、左記の住所までお送り下さい。

同行のお仲間をお誘い合わせ願えば幸いです。

送リ先

〒102 東京都千代田区飯田橋

一―二一―六

法然上人鑽仰会

〒839-11 福岡県久留米市善導寺町

飯田五五〇

大本山善導寺内

一田牛畝先生宛

新年賀謹

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇—一

大正大学

電話(〇三)九一八—七三一—代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一一—二四一—代表
通信教育部 四九一一—〇二三九

淑徳短期大学

学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五—三一—七

京都文教短期大学

学長大橋俊有

〒611 宇治市槇島町八〇

埼玉工業大学

松川文豪

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五—一四—一

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒802 熊本市九品寺三—一—一

学校法人 芝学園

理事長

豊岡益人

学校長

徳久鐵郎

東山学園長

石井俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五一

徳興山 建中寺

〒461 名古屋市中東区筒井一—七—五七

神田寺(旧法禪寺・安良寺)

学校 眞理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三—四—一〇
電話(〇三)二五一—八六八三—五

法然上人降誕聖地

美作 誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話(〇八六七)八—二二—〇二

新年賀謹

鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 佐藤 行信 〒248 鎌倉市長谷四―二―二八	愚鈍院住職 中村 真道 〒980 仙台市新寺三―二―一七 テレホン法話〇二二二九九九―〇九〇三	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤 順底 〒020 盛岡市南大通三―一―四九	弘経寺 金田 明進 〒302 取手市白山前二―九―二八 電話(〇二九七七)二―〇二八九
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部 仙順 電話(〇三八二一)三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口 善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺	西住院 戸川 靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤 弘道 〒328 栃木市万町二―一四 電話(〇二八二二)二二一〇八〇二	芳泉寺 なぎ 柳 楽 真 純 しん じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗教学局長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三三)二三一四〇〇〇	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟 真 寺 電話(〇五三三)五二一五五六六

新年賀謹

無量山 伝通院

住職 吉川 哲雄

九品寺住職

漆間 純成

〒530 大阪市北区同心二一四一八
電話(〇六)三五一七六八二

回向院住職

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二八一〇

九品仏浄真寺

清水 順碩

東京都世田谷区奥沢

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺
浄心 寺

小池 政雄

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八一四
電話(〇一三八)二六―五二二五

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二
電話(〇四四)二二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一

清岸 寺

原口 徳正

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六一四
仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―一二

正覚寺住職

楠美 知行

光運寺住職

飯田 信弘

〒510 四日市市中部三一―一二

新年賀謹

廣隆寺住職

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

浄土宗議會議員

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二一五一

お骨仏の寺 一心寺

高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五
電話(〇六)七七一一〇三七一(代)

撰取院住職

聖徳保育園長

金子貫達

〒850 長崎市錢座町四一五九

聖徳寺中

浄土宗議會議員

光明寺住職

山口諦存

〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇

新善光寺住職

太田隆賢

〒064 札幌市中央区南六条西一丁目

光心寺

北山良祐

〒425 岡崎津市東小川一六六一

教育図書 大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋一一一一六

電話(〇三)二六二一五九四四

法然上人讃仰会

同人一同

維持会員一同

会員一同

新年賀謹

萩市 常念寺

古本超然

稲田稔界

祐天寺

巖谷勝雄

八木善祐

〒448 刈谷市野田西屋敷二一一

昌福寺

大本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨謙順

南足柄市沼田三一五

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二一一三一八

法然上人二十五霊場

第二番仏生山法然寺

細井俊明

雲心寺

桑山春山

〒456 名古屋市熱田区尾頭町三一一九

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和五十八年十二月二十五日 印刷

昭和五十九年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人饗仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

新年賀謹

大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法	大本山 金戒光明寺 法主 稻岡 覚 順	大本山 増上寺 法主 中村 康 隆	総本山 知恩院 門主 藤井 実 応
大本山 善光寺大本願 法主 一条 智 光	大本山 光明寺 法主 藤吉 慈 海	大本山 善導寺 法主 一田 善 寿	大本山 清浄華院 法主 江藤 澄 賢

人生は旅。巡礼も旅。道たどれば心さやか

謹 賀 新 年

昭和五十九年 元旦

中国 33 観 音 霊 場 会

会長 小林海暢
 札所寺院住職一同



慈悲にふれる

事務局 岡山市西大寺中 3 丁目 8 - 8 ☎ (08694) 2 - 2058